

十点

③手紙から声のこぼるる霜夜かな

恩田 才美

霜夜には音がある。それはヴィオラの調べに似て。この手紙でしか逢うことのできなくなった人達の声を繰り返し聞いている。

④果てのなき塵炉作業や流れ星

増田 守

塵炉には様々な作業が必要であり、事の性質上、その多くは遠隔操作に頼るほかない。原子力発電を止めるには、地道かつ危険で困難な作業の積み重ねが必要である。原子力発電の美名のもとに誘致され、電源立地の交付金に群がったにしても、その一瞬の存在が負の遺産であることは否定できない。流れ星の多くは、一瞬の内に通過する。

八点

⑤稔り田の底なる土の放射線

増田 守

放射線を出す土壌が苧田の底に残留しており、これの排除を求めた農業者の請求が裁判所に却下された。その理由は、放射線の発生部分とその他の部分とは、一体不可分的に存在しているから分離判断できない、という分かったようではわからない論理である。最近は大企業や体制擁護の判決が多いようだ。

七点

⑥こおろぎよそろそろ靴を磨かねば

弘友 秀夫

足元に目を遣ると、こおろぎと自分の靴が目にはいりました。磨きどきを迎えたツヤのない靴と取り合わせることで、こおろぎの黒々と照り輝いた身体、ひいては生命力のようなものが引き立つのではないかと考えました。

山鞋ふ母の居室の椅子の向き

柏尾のり子

母は見なれた山のおもとに建つ老人ホームで暮らしています。十月からその山のところどころが紅葉を始め、十一月には更に赤さが増していました。母の部屋の安楽椅子は山が見えるように窓際においてあります。娘達が顔を見に行かない日には、どんな気持ちでその山を眺めているのかと、いつも、少し胸がつまる思いで横浜に帰って来ます。自分の行く先を考えさせられる時でもあります。

六点

⑦礼砲の響きに和する菊日和

坂本 則子

令和になり、即位礼正殿の儀が行われました。天皇の即位に関する句を残したい思いで、桜蔭俳話会に投句致

しました。札幌の間に、虹を見られた方も多いと存じます。良き令和となつて欲しいと念じ作りました。

五点を

②旅といふ刻積む遊び星流る

恩田 才美

「人生は旅である。つまり旅は人生である。」とはいふもののこの本意は、高年齢の域にある私にはかなり重く、厳しいものに行きつきそうだ。肩の荷が重くなれば歩けない、転ぶしかない、旅は出来ない……。身を軽くする術を遊び心に求め歩き続けていきたい。この山河を愛する人達との出会いを求めて。季語の星流るはかなり気に入っている。

ひこうき雲一直線に秋に入る

辻 幸子

立秋といつてもまだまだ暑さの盛り。でも空は気のせいかほんの少し秋を感じます。見上げると真白い飛行機雲がさんざんのびていきました。まるで秋の中に入っていくような……。そんなことを表現しました。

身に入むや闇あかあかと首里の城

古野 明美

先般、報道番組の画面の中で、沖縄の首里城が燃えていた。真つ暗な闇の中に、赤い炎が大きく上つていた。炎は、さらに勢いを増し、燃え広がり、やがて骨組だけとなり、燃え落ちていった。ようやく復元された王城が、一瞬にして、消えて失くなるとは、歴史に翻弄された首里城の定めだったのでしようか。その画面は、息を呑む光景でありました。滅びゆく「物」の哀切さを想わずにはいられませんでした。その時の気持ちを一句に込めました。

四点

軍港の正午のメロディ秋うらら

岩野ヤエ子

横須賀市汐入のヴェルニ公園へ絵を描きに行きました。よく晴れ風のない小春日和で、公園の前の海は紺碧色です。その前には、潜水艦やアメリカの航空母艦が碇泊していました。艦は描いてみたいほど形が良く色も薄グリーや黄味がそそられました。正午になったのでしようか、オルゴールのやさしいメロディーが流れてきました。見のどかな景色そのものですが、有事があればこれらの艦は、急ぎ動き始めるのです。平和な風景はみせかけなのだなと思いました。

妖精のひそむコスモス揺れてをり

藤本 友子

十月初め、ズーラシア奥の里山ガーデンに行った時の句です。多くの種類の秋の花が咲き乱れ、それはそれは美しい光景が広がっていました。中でも目を奪われたのは、コスモスのエリアです。細い茎の先の可憐な花々がかすかな風に揺れているのです。きっと、花の妖精が揺らしているに違いないと感じたのを、そのまま句にしてみました。